

葉

太宰治

青空文庫

撰えらばれてあることの

恍惚こうこうと不安と

二つわれにあり

ヴェルレエヌ

死のうと思つていた。ことしの正月、よそから着物を一反もらった。お年玉としてである。着物の布地は麻であつた。鼠色のこまかい縞しまめ目が織りこめられていた。これは夏に着る着物であろう。夏まで生きていようと思つた。

ノラもまた考えた。廊下へ出てうしろの扉をばたんとしめたときに考えた。帰ろうかしら。

私が変わるいことをしないで帰ったら、妻は笑顔をもつて迎えた。

その日その日を引きずられて暮しているだけであつた。下宿屋で、たった独りして酒を飲み、独りで酔い、そうしてこそそこそ蒲ふ団とんを延べて寝る夜はことにつらかつた。夢をさえ見なかつた。疲れ切つていた。何をするにも物憂かつた。「汲くみ取り便所いは如何かに改善すべきか？」という書物を買つて来て本気に研究したこともあつた。彼はその当時、従来の人糞じんぷんの処置には可成かなりまいつて

いた。

新宿の歩道の上で、こぶしほどの石塊いしころがのろのろ這はつて歩いているのを見たのだ。石が這つて歩いてるな。ただそう思っていた。しかし、その石塊いしころは彼のまえを歩いている薄汚い子供が、糸で結んで引摺ひきずつているのだということが直ぐに判った。

子供に欺かれたのが淋しいのではない。そんな天変地異をも平気で受け入れ得た彼自身の自棄やけが淋しかったのだ。

そんなら自分は、一生涯こんな憂鬱と戦い、そうして死んで行くということに成るんだな、と思えばおのが身がいじらしくもあつた。青い稲田が一時にぽつと霞かすんだ。泣いたのだ。彼は狼狽うろたえ

だした。こんな安価な殉情的な事柄なみだに涙を流したのが少し恥かしかったのだ。

電車から降りるとき兄は笑うた。

「莫迦ばかにしよげてるな。おい、元気を出せよ」

そうして竜の小さな肩を扇子でポンと叩いた。夕闇のなかでその扇子が恐ろしいほど白つぽかった。竜は頬のあからむほど嬉しくなった。兄に肩をたたいて貰ったのが有難かったのだ。いつもせめて、これぐらいにでも打ち解けて呉くれるといいが、と果敢はかなくも願うのだった。

訪ねる人は不在であつた。

兄はこう言った。「小説を、くだらないとは思わぬ。おれには、ただ少しまだるっこいだけである。たった一行の真実を言いたいばかりに百頁の雰囲気をこしらえている」私は言い憎そうに、考ええしながら答えた。「ほんとうに、言葉は短いほどよい。それだけで、信じさせることができるならば」

また兄は、自殺をいい気なものとして嫌った。けれども私は、自殺を処世術みたいな打算的なものとして考えていた矢先であったから、兄のこの言葉を意外に感じた。

白状し給え。え？ 誰の真似なの？

水みづ到いたりて渠きよ成なる。

彼は十九歳の冬、「哀あわれ蚊が」という短篇を書いた。それは、よい作品であつた。同時に、それは彼の生涯の渾こん沌とんを解とくだいな鍵かぎとなつた。形式には、「雛ひな」の影響が認められた。けれども心は、彼のものであつた。原文のまま。

おかしな幽霊を見たことがございます。あれは、私が小学校にあがつて間もなくのことです。どうせ幻燈のようにとろんと霞あんでいるに違いございませぬ。いいえ、でも、その青あ蚊帳おがやに写した幻燈のような、ぼやけた思い出が奇妙にも私には一年と愈いよ々いよはつきりして参るような気がするのでございます。

なんでも姉様がお婿をとつて、あ、ちようどその晩のこと
でございます。御祝言の晩のことでございます。芸者衆がたくさん
私の家に来て居りまして、ひとりのお綺麗きれいな半玉さんに紋附ほころの綻
びを縫つて貰つたりしましたのを覚えて居りますし、父様が離座はな
敷れの真暗な廊下で脊のお高い芸者衆とお相撲すもうをお取りになつて
らつしやつたのもあの晩のことでございます。父様はその翌年
お歿なくなりになられ、今では私の家の客間の壁の大きな御写真の
なかに、おはいりになつて居られるのでございますが、私はこの
御写真を見るたびごとに、あの晩のお相撲のことを必ず思い出す
のでございます。私の父様は、弱い人をいじめるようなことは決
してなさらないお方でございましたから、あのお相撲も、きつと

芸者衆が何かひどくいけないことをなしたので父様はそれをお懲こころしめになつていらつしやつたのでございましょう。

それやこれやと思ひ合せて見ますと、確かにあれは御祝言の晩に違いございませぬ。ほんとうに申し訳がございませぬけれど、なにもかも、まるで、青蚊帳の幻燈のような、そのような有様でございますから、どうで御満足の行かれますようお話ができかねるのでございます。てもなく夢物語、いいえ、でも、あの晩に哀蚊の話聞かせて下さったときの婆様の御めめと、それから、幽霊、とだけは、あれだけは、どなたがなんと仰おっしゃ言つたとて決して決して夢ではございませぬ。夢だなどとおろかなこと、もうこれ、こんなにまざまざ眼先に浮んで参つたではございせんか。

あの婆様の御めめと、それから。

さようでございます。私の婆様ほどお美しい婆様もそんなにあるものではございませぬ。昨年の夏お歿くなりになられましたけれど、その御死顔ごしごんと言いつたら、すごいほど美しいとはあれでございましょう。白はくろう蠟ろうの御両頬ごりょうほには、あの夏木立の影も映らむばかりでございました。そんなにお美しくていらつしやるのに、縁遠くて、一生鉄漿かねをお附つけせずにお暮くしなされたのでございます。「わしという万年白齒はくしを餌えにして、この百万の身代みしろができたのじやぞえ」

富本とみもとでこなれた渋い声で御生前ごせぜんよくこう言い言いして居ゐられましたから、いずれこれには面白い因縁いん縁でもあるのでございませよ

う。どんな因縁なのだろうなどと野暮なお探りはお止しなさいませ。婆様がお泣きなさるでございましょう。と申しますのは、私の婆様は、それはそれは粋いきなお方で、ついに一度も縮ちりめん緬の縫紋の御羽織をお離しになったことがございませんでした。お師匠をお部屋へお呼びなされて富本のお稽古けいこをお始めになられたのも、よほど昔からのことでございました。私なぞも物心地が附いてからは、日がな一日、婆様の老松おいまつやら浅間あさまやらの咽むせび泣くような哀調のなかにうつとりしているときがままございました程で、世間様から隠居芸者とはやされ、婆様御自身もそれをお耳にしては美しくお笑いになって居られたようでございました。いかなることか、私は幼いときからこの婆様が大好きで、乳母から

離れるとすぐ婆様の御懐に飛び込んでしまったのでございます。もつとも私の母様は御病身でございました故、子供には余り構うて呉れなかつたのでございます。父様も母様も婆様のほんとうの御子ではございませぬから、婆様はあまり母様のほうへお遊びに参りませず四六時中、離座敷のお部屋そばにばかりいらつしやいますので、私も婆様のお傍そばにくつついて三日も四日も母様のお顔を見ないことは珍らしゆうございませぬでした。それゆえ婆様も、私の姉様なぞよりずっと私のほうを可愛がつて下さいまして、毎晩のように草双紙くさそうしを読んで聞かせて下さったのでございます。なにかにも、あれあの八百屋お七の物語を聞いたときの感激は私は今でもしみじみ味うことができるのでございます。そしてまた、婆

様がおたわむれに私を「吉三」^{きちぞう}「吉三」とお呼びになつて下さつた折のその嬉しさ。らんぷの黄色い燈火^{ともしび}の下でしよんぼり草双紙をお読みになつていらつしやる婆様のお美しい御姿、左様、私はことごとくよく覚えていたのでございます。

とりわけあの晩の哀蚊の御寝物語は、不思議と私には忘れることができないのでございます。そう言えばあれは確かに秋でございました。

「秋まで生き残されている蚊を哀蚊と言うのじゃ。蚊燻^{かいぶ}しは焚^たかぬもの。不憫^{ふびん}の故にな」

ああ、一言一句そのまんま私は記憶して居ります。婆様は寝ながら滅^め入^いるような口調でそう語られ、そうそう、婆様は私を抱い

てお寝になられるときには、きまって私の両足を婆様のお脚のあいだに挟んで、温めて下さったものでございます。或る寒い晩なぞ、婆様は私の寝巻をみんなお剥はぎとりになっておしまいになり、婆様御自身も輝くほどお綺麗な御素肌をおむきだし下さって、私を抱いてお寝になりお温めなされてくれたこともございました。それほど婆様は私を大切にしていらっしゃったのでございます。

「なんの。哀蚊はわしじやがな。はかない……」

仰言りながら私の顔をつくづくと見まもりましたけれど、あんなにお美しい御めめもないものでございます。母屋おもやの御祝言の騒ぎも、もうひっそり静かになっていたようでもございましたし、なんでも真夜中ちかくでございましたでしょう。秋風がさらさらと

雨戸を撫なでて、軒の風鈴がその度毎に弱弱しく鳴って居りましたのも幽かすかに思ひだすことができるのでございます。ええ、幽霊を見たのはその夜のことでございます。ふつと眼をさましまして、おしっこ、と私は申しましたのでございます。婆様の御返事がございませんでしたので、寝ぼけながらあたりを見廻しましたけれど、婆様はいらっしゃらなかつたのでございます。心細く感じながらも、ひとりでそつと床から脱け出しまして、てらてら黒光りする櫛けやき普請の長い廊下をこわごわお厠かわやのほうへ、足の裏だけはいやに冷や冷やして居りましたけれど、なにさま眠くつて、まるで深い霧のなかをゆらりゆらり泳いでいるような気持ち、そのときです。幽霊を見たのでございます。長い長い廊下の片隅に、白

くしよんぼり蹲うすくまつて、かなり遠くから見たのでございますから、ふいるむのように小さく、けれども確かに、確かに、姉様と今晚の御婿様とがお寝になつて居られるお部屋を覗のぞいているのでございます。幽霊、いいえ、夢ではございませぬ。

芸術の美は所詮しよせん、市民への奉仕の美である。

花きちがいの大工がいる。邪魔だ。

それから、まち子は眼を伏せてこんなことを囁ささやいた。

「あの花の名を知っている？ 指をふれればきちんとわれて、き

たない汁をはじきだし、みるみる指を腐らせる、あの花の名が判つたらねえ」

僕はせせら笑い、ズボンのポケットへ両手をつつ込んでから答えた。

「こんな樹の名を知っている？ その葉は散るまで青いのだ。葉の裏だけがじりじり枯れて虫に食われているのだが、それをこっそりかくして置いて、散るまで青いふりをする。あの樹の名さえ判つたらねえ」

「死ぬ？ 死ぬのか君は？」

ほんとうに死ぬかも知れないと小早川は思った。去年の秋だつ

たかしら、なんでも青井の家に小作争議が起つたりしていろいろのごたごたが青井の一身上に振りかかったらしいけれど、そのときも彼は薬品の自殺を企て三日も昏こんすい睡し続けたことさえあつたのだ。またついせんだつても、僕がこんなに放蕩ほうとうをやめないのもつまりは僕の身体がまだ放蕩に堪え得るからであらう。去勢されたような男にでもなれば僕は始めて一切の感覺的快樂をさけて、鬭争への財政的扶助に専心できるので、と考えて、三日ばかり続けてP市の病院に通い、その伝染病舎の傍の泥溝どぶの水を掬すくつて飲んだものだそうだ。けれどもちよつと下痢をしただけで失敗さ、とそのことを後で青井が頬あからめて話すのを聞き、小早川は、そのインテリ臭い遊戯をこのうえなく不愉快に感じたが、しかし、

それほどまでに思いつめた青井の心が、少からず彼の胸を打ったのも事実であつた。

「死ねば一番いいのだ。いや、僕だけじゃない。少くとも社会の進歩にマイナスの働きをなしている奴等は全部、死ねばいいのだ。それとも君、マイナスの者でもなんでも人はすべて死んではならぬという科学的な何か理由があるのかね」

「ば、ばかな」

小早川には青井の言うことが急にばからしくなつて来た。

「笑つてはいけない。だって君、そうじゃないか。祖先を祭るために生きていなければならぬとか、人類の文化を完成させなければならぬとか、そんなたいへんな倫理的な義務としてしか僕

たちは今まで教えられていないのだ。なんの科学的な説明も与えられていないのだ。そんなら僕たちマイナスの人間は皆、死んだほうがいいのだ。死ぬとゼロだよ」

「馬鹿！ 何を言っついていやがる。どだい、君、虫が好すぎるぞ。それは成る程、君も僕もぜんぜん生産にあずかっていない人間だ。それだからとて、決してマイナスの生活はしていないと思うのだ。君はいつたい、無産階級の解放を望んでいるのか。無産階級の大勝利を信じているのか。程度の差はあるけれども、僕たちはブルジョアジイに寄生している。それは確かだ。だがそれはブルジョアジイを支持しているのとはぜんぜん意味が違うのだ。一のプロレタリアアトへの貢献と、九のブルジョアジイへの貢献と君は言

ったが、何を指してブルジョアジイへの貢献と言うのだろう。わざわざ資本家の懐を肥してやる点では、僕たちだつてプロレタリアアトだつて同じことなんだ。資本主義的経済社会に住んでいることが裏切りなら、闘士にはどんな仙人が成るのだ。そんな言葉こそウルトラというものだ。

キンデルクランクハイト

小 兎 病 というものだ。一

のプロレタリアアトへの貢献、それで沢山。その一が尊いのだ。その一だけの為に僕たちは頑張つて生きていなければならぬのだ。そうしてそれが立派にプラスの生活だ。死ぬなんて馬鹿だ。死ぬなんて馬鹿だ」

生れてはじめて算術の教科書を手にした。小型の、まっくろい

表紙。ああ、なかの数字の羅列られつがどんなに美しく眼にしみたことか。少年は、しばらくそれをいじくっていたが、やがて、巻末のペエジにすべての解答が記されているのを発見した。少年は眉をひそめて呺つぶやいたのである。「無礼だなあ」

外はみぞれ、何を笑うやレニン像。

叔母の言う。

「お前はきりようがわるいから、愛あい嬌きようだけでもよくなさい。お前はからだが弱いから、心だけでもよくなさい。お前は嘘うそがうまいから、行いだけでもよくなさい」

知つていながらその告白を強いる。なんといういんげんな刑罰であろう。

満月の宵。光つては崩れ、うねつては崩れ、逆巻き、のた打つ浪のなかで互いに離れまいとつないだ手を苦しまぎれに俺が故意わざと振り切つたとき女は忽ち浪たちまに吞まれて、たかく名を呼んだ。俺の名ではなかつた。

われは山賊。うぬが誇をかすめとらむ。

「よもやそんなことはあるまい、あるまいけれど、な、わしの銅像をたてるとき、右の足を半歩だけ前へだし、ゆつたりとそりみにして、左の手はチョッキの中へ、右の手は書き損じの原稿をにぎりつぶし、そうして首をつけぬこと。いやいや、なんの意味もない。雀の糞を鼻のあたりに浴びるなど、わしはいやなのだ。そうして台石には、こう刻んでおくれ。ここに男がいる。生れて、死んだ。一生を、書き損じの原稿を破ることに使った」

メフィストフェレスは雪のように降りしきる薔薇ばらの花弁に胸を頬を掌を焼きこがされて往生したと書かれてある。

留置場で五六日を過して、或る日の真昼、俺はその留置場の窓から脊のびして外を覗くと、中庭は小春の日ざしを一杯に受けて、窓ちかくの三本の梨の木はいずれもほつほつと花をひらき、そのしたで巡査が二三十人して教練をやらされていた。わかい巡査部長の号令に従って、皆はいっせいに腰から捕縄を出したり、呼笛を吹きならしたりするのであった。俺はその風景を眺め、巡査ひとりひとりの家について考えた。

私たちは山の温泉場であてのない祝言をした。母はしじゅうくつくつと笑っていた。宿の女中の髪のかたちが奇妙であるから笑うのだと母は弁明した。嬉しかったのであろう。無学の母は、私

たちを妒ばたに呼びよせ、教訓した。お前は十六魂たましだから、と言いかけて、自信を失つたのである。もつと無学の花嫁の顔を覗き、のう、それでせんか、と同意を求めた。母の言葉は、あつていたのに。

妻の教育に、まる三年を費やした。教育、成つたころより、彼は死のうと思いはじめた。

病む妻や とどこおる雲 鬼すすき。

赤え赤え煙こあ、もくらもくらと蛇じやたい体たいみために天さのぼつて

の、ふくれた、ゆららと流れた、のっそらと大浪うった、ぐるつぐるつと渦まえた、間もなくし、火の手あ、ののののと荒けなくなり、地ひびきたてた山ばのぼり始めたずおん。山あ、てっぺらまで、まんどろに明るくなつたずおん。どうどうと燃えあがる千本万本の冬木立ば縫い、人を乗せたまつくろい馬こあ、風みたいに馳はせていたずおん。(ふるさとという言葉で)

たった一言知らせて呉れ！ *≪Nevermore≫*

空あおの蒼あおく晴れた日ならば、ねこはどこからかやって来て、庭にわの山茶花さざんかのしたで居眠りしている。洋画をかいている友人は、ペル

シヤでないか、と私に聞いた。私は、すてねこだろう、と答えて置いた。ねこは誰にもなつかなかった。ある日、私が朝食の鰯いわしを焼いていたら、庭のねこがものうげに泣いた。私も縁側へでて、にやあ、と言った。ねこは起きあがり、静かに私のほうへ歩いて来た。私は鰯を一尾なげてやった。ねこは逃げ腰をつかいながらもたべたのだ。私の胸は浪うった。わが恋は容いれられたり。ねこの白い毛を撫でたく思い、庭へおりた。脊中の毛にふれるや、ねこは、私の小指の腹を骨までかりりと噛かみ裂いた。

役者になりたい。

むかしの日本橋は、長さが三十七間四尺五寸あったのであるが、いまは廿七間しかない。それだけ川幅がせまくなつたものと思わねばいけない。このように昔は、川と言わず人間と言わず、いまよりはるかに大きかつたのである。

この橋は、おおむかしの慶長七年に始めて架けられて、そのうちたびばかり作り変えられ、今のは明治四十四年に落成したものである。大正十二年の震災のときは、橋のらんかんに飾られてある青銅の竜の翼が、ほのお焰に包まれてまっかに焼けた。

私の幼時に愛した木版の東海道五十三次道中すごろく双六では、ここが振りだしになつていて、幾人ものやつこのそれぞれ長い槍を持つてこの橋のうえを歩いている画が、のどかにかかれてあつた。

もとはこんなぐあいには繁華であつたのであろうが、いまは、たいへんさびれてしまった。魚河岸うおがしが築地つぎじへうつつてからは、いつそ名前もすたれて、げんざいは、たいていの東京名所絵葉書から取除かれています。

ことし、十二月下旬の或る霧のふかい夜に、この橋のたもとで異人の女の子がたくさんの乞食こじきの群からひとり離れて佇たたずんでいた。花を売っていたのは此の女の子である。

三日ほどまえから、黄昏たそがれどきになると一束の花を持ってここへ電車ですて来て、東京市の丸い紋章にじやれついている青銅の唐獅子からじしの下で、三四時間ぐらい黙つて立っているのである。

日本のひとは、おちぶれた異人を見ると、きつと白系の露西亞ロシヤ。

人にきめてしまう憎い習性を持っている。いま、この濃霧のなかで手袋のやぶれを気にしながら花束を持って立っている小さい子供を見ても、おおかたの日本のひとは、ああロシアがいる、と楽な気持で呟くにちがいない。しかも、チエホフを読んだことのある青年ならば、父は退職の陸軍二等大尉、母は傲慢ごうまんな貴族、とうつとりと独断しながら、すこし歩をゆるめるであろう。また、ドストエーフスキイを覗きはじめてた学生ならば、おや、ネルリ！と声を出して叫んで、あわてて外がい套とうの襟えりを搔かきたてるかも知れない。けれども、それだけのことであつて、そのうえ女の子に就いてのふかい探索をして見ようとは思わない。

しかし、誰かひとりが考える。なぜ、日本橋をえらぶのか。こ

んな、人通りのすくないほの暗い橋のうえで、花を売ろうなどというのは、よくないことなのに、——なぜ？

その不審には、簡単ではあるが頗るすこぶロマンチックな解答を与え得るのである。それは、彼女の親たちの日本橋に対する幻影に由来している。ニホンでいちばんにぎやかな良い橋はニホンバシにちがいない、という彼等のおだやかな判断に他ならぬ。

女の子の日本橋でのあきないは非常に少なかった。第一日目には、赤い花が一本売れた。お客は踊子である。踊子は、ゆるく開きかけている赤いつぼみ蕾を選んだ。

「咲くだろうね」

と、乱暴な聞きかたをした。

女の子は、はつきり答えた。

「咲キマス」

二日目には、酔いどれの若い紳士が、一本買った。このお客は酔っていながら、うれしい顔をしていた。

「どれでもいい」

女の子は、きのうの売れのこりのその花束から、白い蕾をえらんでやったのである。紳士は盗むように、こつそり受け取った。

あきないはそれだけであった。三日目は、即ちきようである。つめたい霧のなかに永いこと立ちつづけていたが、誰もふりむいて呉れなかった。

橋のむこう側にいる男の乞食が、松葉杖つきながら、電車みち

をこえてこつちへ来た。女の子に縄張りのことと言いがかりをつけたのだった。女の子は三度もお辞儀をした。松葉杖の乞食は、まっくろい口鬚くちひげを噛みしめながら思案したのである。

「きょう切りだぞ」

とひくく言つて、また霧のなかへ吸いこまれていった。

女の子は、間もなく帰り仕度をはじめた。花束をゆすぶって見た。花屋から屑花くずはなを払いさげてもらつて、こうして売りに出たから、もう三日も経つているのであるから花はいい加減にしおれていた。重そうにうなだれた花が、ゆすぶられる度毎に、みんなあたまを顫ふるわせた。

それをそつと小わきにかかえ、ちかくの支那蕎麦しなそばの屋台へ、寒

そうに肩をすぼめながらはいって行つた。

三晩つづけてここで雲吞ワンタンを食べるのである。そこのあるじは、支那のひとであつて、女の子を一人並の客として取扱つた。彼女にはそれが嬉しかったのである。

あるじは、雲吞ワンタンの皮を巻きながら尋ねた。

「売レマシタカ」

眼をまるくして答えた。

「イイエ。……カエリマス」

この言葉が、あるじの胸を打つた。帰国するのだ。きつとそうだ、と美しく禿はげた頭を二三度かるく振つた。自分のふるさとを思いつつ釜から雲吞の実を掬つていた。

「コレ、チガイマス」

あるじから受け取った雲呑の黄色い鉢を覗いて、女の子が当惑そうに呟いた。

「カマイマセン。チャシユウワンタン。ワタシノゴチソウデス」
あるじは固くなつて言った。

雲呑は十銭であるが、チャシユウワンタン 叉焼雲呑は二十銭なのである。

女の子は暫くもじもじしていたが、やがて、雲呑の小鉢を下へ置き、肘ひじのなかの花束からおおきい蕾のついた草花を一本引き抜いて、差しだした。くれてやるというのである。

彼女がその屋台を出て、電車の停留場へ行く途中、しなびかかった悪い花を三人のひとに手渡したことをちくちく後悔しだした。

突然、道ばたにしゃがみ込んだ。胸に十字を切つて、わけの判らぬ言葉でもつて

烈はげしいお祈りをはじめたのである。

おしまいに日本語を二言囁いた。

「咲クヨウニ。咲クヨウニ」

安楽なくらしをしているときは、絶望の詩を作り、ひしがれたくらしをしているときは、生のよろこびを書きつづる。

春ちかきや？

どうせ死ぬのだ。ねむるようなよいロマンスを一篇だけ書いてみたい。男がそう祈願しはじめたのは、彼の生涯のうちでおそらくは一番うつとうしい時期に於いてであつた。男は、あれこれと思いをめぐらし、ついにギリシヤの女詩人、サフォに黄金の矢を放つた。あわれ、そのかぐわしき才色を今に語り継がれているサフォこそ、この男のもやもやした胸をときめかす唯一の女性であつたのである。

男は、サフォに就いての一二冊の書物をひらき、つぎのようなことがらを知らされた。

けれどもサフォは美人でなかつた。色が黒く齒が出ていた。ファオンと呼ぶ美しい青年に死ぬほど惚れた^ほ。ファオンには詩が判

らなかつた。恋の身投をするならば、よし死にきれずとも、その
こがれた胸のおもいが消えうせるといふ迷信を信じ、リュウカデ
イアの岬から怒濤どとうめがけて身をおどらせた。

生活。

よい仕事をしたあとで

一杯のお茶をすすする

お茶のあぶくに

きれいな私の顔が

いくつもいくつも

うつっているのさ

どうにか、なる。

青空文庫情報

底本：「晩年」新潮文庫、新潮社

1947（昭和22）年12月10日発行

1985（昭和60）年10月5日70刷改版

1998（平成10）年7月20日103刷

初出：「鵜」（季刊同人誌）

1934（昭和9）年4月

※「日本文学(e-text)全集」作成ファイル

入力：加藤るみ

校正：深水英一郎

1999年10月7日公開

2013年4月6日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.w.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

葉
太宰治

2020年 7月13日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しむ青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>